ゴードン研究会議に出席して

阿 部 一 博*

Topics of Postharvest Physiology in
Gordon Research Conferene

Kazuhiro ABE*

*College of Agriculture, University of Osaka Prefecture, Nozu-umemachi,
Sakai, Osaka 591*

1. ゴードン研究会議について

設立者 Dr. Meil E. GORDON の名に因んだゴードン研究会議は農学, 工学, 医学など自然科学のあらゆる分野を含み, 現在のところ毎年約 130 の会がもたれ, 個々のサブジェクトについては 4 年毎に研究会議が開催される。ゴードン研究会議の開催期間は夏・冬約 2 カ月間で冬季はカリフォルニア州で, 夏季はニューハンプシャー州で行われる。今夏は 5 分野を除く 110 の分野の会議がそれぞれ 5 日間ずつアメリカ合衆国のニューハンプシャー州の 11 カ所において開かれた。

筆者の関心の深い『Postharvest Physiology』は 7 月にアンドーバーのプロクターアカデミーで開催された。

開催地のプロクターアカデミーはボストンから車で約 1 時間 30 分ほど北方にあり, 写真 1 のホールや本部を中心に約 30 戸の寄宿舎や体育館などが森の中に散在している。

この研究会議の特徴のひとつは開催期間中, 参加者のほぼ全員が各開催校の寄宿舎で寝食を共にすることである。

今回の参加者は, アメリカ合衆国, イスラエル, カナダ, ヨーロッパ諸国, 日本 (7 名) など 10 数カ国からの 147 名であった。なお参加申し込みは 200 名以上あったが宿舎の都合や会議の進行上議長 (今回はマサチューセッツ大学 W. J. Bramlage 教授) によって 140 数名に制限さ

写真 1 講演会場と (左) とディスカッション中の参加者
れた。

2. 研究会議の特徴

(1) 発表課題

研究会議ではシンポジウム形式の講演会とポスターセッションが行われる。

講演会は基礎から応用まで次の 9 課題に分かれていた。

セッション 1: Molecular biology of fruit ripening

セッション 2: Fruit softening and cell wall metabolism during ripening

セッション 3: Chilling injury-Mechanisms and implications

*大阪府立大学農学部 (〒591 堺市百舌鳥梅町 4)

セッション 4: Ethylene controls in senescence and postharvest physiology

セッション 5: Modified atmospheres in postharvest biology

セッション 6: Wound responses of horticultural crops

セッション 7: Resistance to disease in harvested plant materials

セッション 8: Accomplishments, opportunities, and challenges

セッション 9: Applications of postharvest physiology in meeting current human needs

各課題について 2～4 名の演者が講演を行い、続いて質疑応答が行われる。

なお、セッション 6 では兵藤宏氏（静岡大学農学部）が、Induction of enzymes and biochemical and metabolic changes in wounded plant tissue について講演された。

ポスターセッションでは 40 数名の発表があり、その内 6 課題がつぎに示す日本からの発表であった。

松尾友明氏（鹿児島大学農学部）

Endogenous factors for determining chilling sensitivity in higher plants

寺井弘文氏（神戸大学農学部）

Regulation mechanism of ethylene production in normal and mutant tomato fruits

邨田卓夫氏（静岡大学農学部）

Effect of sucrose fatty acid esters on the alleviation of chilling injury on some fruit and vegetables

山内直樹氏（兵庫県立姫路短大）

Chlorophyll degradation with degreening of kabosu (Citrus Sphaerocarps Hort ex Tanaka) fruits

辰巳保夫氏（宮崎大学農学部）

Prolonged storage of the green acid citrus using controlled atmosphere of file packaging

阿部一博（大阪府立大学農学部）

Effect of bacterial ethylene absorbent on keeping quality of fruits and vegetables

(2) 会 議 の 進 行

この会議の大きな特徴のひとつとして、会議の模様や内容をテープレコーダーやカメラを使って記録してはいけないうことである。講演時は勿論、ポスターセッション会

場においても一切禁止である。要旨集も全くなく、配布されたのは座長、演者、演題のリスト、ポスターセッションの課題名と発表者のリスト、ならびに全出席者名簿だけである。

これは演者らが最も新しい未発表のデータや考え方を安心して自由に発表出来るようにするためである。

質疑応答は熱心で、かなりの時間を割いている。しかも若い人による討論が目立った。質疑応答は自由な雰囲気、満ちているが、質問者の声が小さいと、「もっと大きな声で！」、「聞こえない！」と文句を言われる。

質疑応答の熱心さは今回の研究会議で最も印象深いものであった。しかし、一方でポスターセッションの会場では発表者も質問する人もビールやワインを飲みながらというおらかさも印象的であった。

会議の最終日に、次回 4 年後の議長（今回の副議長）、副議長と開催地・時期を参加者の意向によって決定して会を閉じた。

(3) 発 表 雑 感

今回の研究会議は世界各地の研究者の発表があったが、いずれも表現が上手で、いかに自分の研究を聞き手に納得させるかの工夫がなされていた。メモをとっていたのでいくつかを紹介する。

- ・表より図を多く利用し、しかもていねいに仕上げられている。
- ・データの間に実物の写真が美しく、的が絞られ簡明である。
- ・図表のスライドがカラフルでコンピューターの利用が目立つ。
- ・データの合間や段階に自分の考えをまとめたスライドを入れる。
- ・ウィットに富んだ表現で講演を行う。

また休憩時間などでも写真 1 のようにすぐにディスカッションがあらちちで始まるし、名札はたとえ議長や座長でも所定の位置に付けている。

これらは自分の考えや研究内容ならびに自分自身を相手に認識してもらうための工夫であろう。

講演の最後に研究に協力してくれた人達への謝辞も丁寧で、名前のリストや実物のスライドを使って行う人が多かった。

3. 研究期間中の生活

前述のように参加者は学生用の寄宿舎に泊まっているが、簡単に 1 日のスケジュールを紹介する。

7:30～8:15 朝食。毎食とも座席は自由で、食事

写真2 日本からの参加者（右より邨田氏、松尾氏、寺井氏、兵藤氏、辰巳氏、一人おいて山内氏、阿部）。左から三人目のワタダ博士（Dr. Alley E. Watada, アメリカ農務省）は前回の議長をつとめられた 日系2世の親日家

中も研究の話をする人が多い。

9:00~12:00 講演会

12:15~13:00 昼食

13:00~18:00 自由時間。しかし、有志がテーマごとに小集会を行うこともある。多くの者はハイキング、ジョギング、水泳、テニス、蹄鉄投げなどを楽しんでいた。周辺には3~4軒の店が「メインストリート」にあ

るだけである。

18:00~19:00 夕食

19:30~21:30 講演会

21:30~ ビールなどを飲みながらポスターセッションの会場や宿舎でディスカッション。ちなみに事務局は24:00まで開いている。

服装はいたって自由で写真2のように半ズボンやスポーツシャツもみられ、最終日前夜のバンクエットでさえ、ノーネクタイ、ノースーツであった。

4. おわりに

ゴードン会議の発表内容はレベルが高く、いたって自由に運営されている。Postharvest physiology の分野は果実と野菜の生理的現象や流通についての発表が主なものであったが、今回は分子生物学・遺伝子工学的な研究が増加したことが印象的であった。

なおこのゴードン会議は、過去3年間の研究発表数等を参考に、議長による指名招聘の形をとっており、今回も日本から7名の参加があったことは我国の Postharvest physiology の研究が世界的にも高いレベルに位置するのではないかと思われた。